

令和7年度 片柳中学校 学校課題研究 の主な取り組み 研究領域 教科等横断的視点に立った資質・能力の育成についての研究 (令和6～8年度)

1 研究の方向性や内容の検討

令和6年度の実践成果と課題をふまえ、本年度は資質・能力の育成をより確実なものとするため、以下の重点項目を連動させた研究体制を構築した。

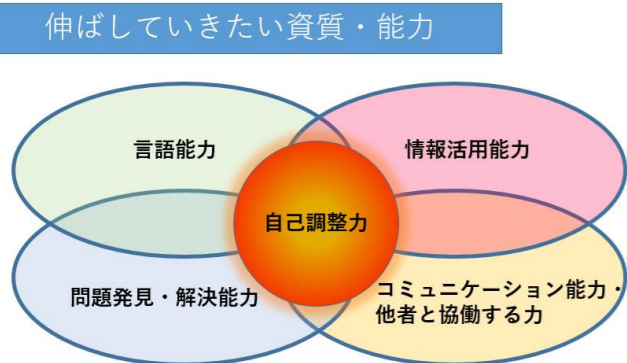
- ① 本校が目指す資質・能力を再定義し、日常的に意識化できる周知方法を確立する。
- ② 各教科の授業実践を Excel に集約し、授業の視点や ICT の利活用などを教員全体で共有。授業力のボトムアップを図る。
- ③ 評価面ではレーダーチャートを導入し、数字で見える学習の結果と授業で見取った生徒の思考や行動の様子を分析し、指導改善を推進する。
- ④ これらの高度な教育活動を支える基盤として、生成 AI を戦略的に活用する。また、業務の効率化を図り、創出された時間を質の高い教材研究へと重点的に充当していく。

2 生徒・教師・保護者の共通認識へ

本校が目指す資質・能力を見直し、令和6年度の「学びに向かう力」から、「自己調整力」を中核としたイメージに変更。4つの資質・能力を育成するに伴って自己調整力も育成されていく、また自己調整力を発揮することによって、4つの資質・能力も育成されていくと考えた。

また、各資質・能力が求める具体的な姿を本校の実態を鑑み教職員全体で検討。さらに、よりイメージしやすくするために、生徒からピクトグラムのデザイン案を募集・作成し、ワークシートに掲載したり、教室等に掲示したりすることで、生徒自身にも学習の目標を確認することができるようにした。

▼自己調整力を中核とした資質・能力のイメージ



▼作成したピクトグラム

3 自己調整力を伸ばすために

月別の学習目標を設定し、月末に達成状況の振り返りを行い、自己調整力やメタ認知の向上を図る。

振り返りでは、上手くいったことと上手くいかなかったことを書きだし、その原因を考えることで自己の学習状況を客観視できるように工夫した。

記入したワークシートはやり取り帳(本校ではスクログ)に貼り付けいつでも確認可能な状態にしている。

▼月別学習目標 (例)

▼学習の振り返り (例)

4 教員の授業力向上のために

本校では、生徒の資質・能力を育成するうえで、教職員間の認識のずれをなくし、共通の方向性で授業改善に取り組むことが重要であると考えた。特に、

- ①資質・能力への理解を深め、授業づくりの視点を増やすこと
- ②異動してきた教員が研究の流れに円滑に参加できる仕組みを整えること
- ③他教科の実践を知り、資質・能力の転用を意識した授業づくりにつなげることの3点が課題として挙げられた。

これらを解決し、教職員全体の底上げを図るため、授業実践を記録する「実践報告シート」を導入した。シートには「育成を意図した資質・能力」「授業のポイント」「実践から見えたこと」を記載し、教科を越えた共有を可能にした。その結果、従来の口頭共有では得られなかった具体的な実践の蓄積が進み、教科会や研修での検討が深まるなど、授業改善の新たな基盤となった。次年度は、この取り組みをさらに生徒の実態に即したものにするため、資質・能力の観点を取り入れた振り返りシートの導入を検討する。あわせて、相互授業参観を実施し、教員同士が学び合う仕組みを強化することで、授業力向上をより組織的・継続的に推進していきたい。

▼片柳中実践報告シート

単元名	育成を意図した資質・能力 ※○つける					授業のポイント・実践内容	今回の実践から見えてきたこと
	言語能力	情報活用能力	問題発見・解決能力	コミュニケーション能力	自己調整力		
方程式の利用	○					意識して取り組んだ場面や生徒の様子を記載。(例:「方程式の利用」の単元で、文章題を解くプロセスを言語化する活動に重点を置いた。具体的には、ペアワークで「なぜその式になるのか」を言葉で説明する時間を5分間設定。さらに、説明する際には「～をxとすると、」や「合計の～は、～と～を足すことで求められるから、」といった接続詞や論理的な言葉の使用を意識するよう促した。これにより、生徒は自分の思考を整理しながら、論理的に表現する練習ができた。)	多くの生徒が、式を立てることはできても、その根拠を言葉で説明することに最初は戸惑っていた。しかし、ペアでアウトプットするうちに、「自分の考えが整理できた」「友達の説明で別の考え方を知ることができた」といった前向きな感想が聞かれた。一方で、説明が苦手な生徒には、教師が個別にヒントを与えたり、具体例を挙げたりするなど、より丁寧なサポートが必要だと感じた。また、今回のような言語化の活動を、他の単元でも継続的に取り入れていきたい。

5 生成 AI の活用

本校は、生成 AI 活用のパイロット校に指定されている。主な活用は校務利用だが、生徒利用も含めて幅広く利活用している。生成 AI 活用の視点と期待される効果は以下の通りである。

< 視点と期待される効果の例 >

- 各教科等の、全国的な事例の情報収集及び本校の取組を改善するための新たな視座を得ること。
- 授業で提出させた生徒意見の集約や学校評価アンケートに代表されるようなアンケートの集約と解析及び種々の改善のための視点を得ること。
- 各教科等の授業における教材の作成効率化及び精度を向上させること。 など

< 場面ごとの具体的な活用例 >

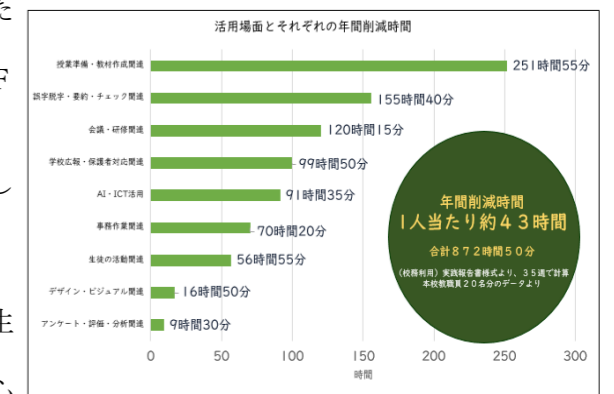
- 授業準備・教材作成関連 → テスト問題のたたき台作成。指導案のたたき台作成。
- 誤字脱字・要約・チェック関連 → テストの誤字脱字チェック。PDF や動画の要約。
- 会議・研修関連 → 職員会議資料作成。校内研修の流れ案作成。
- 学校広報・保護者対応関連 → おたよりやあいさつ文のアイデア出しや推敲。保護者へのお知らせや保護者会等の資料作成。
- AI・ICT 活用関連 → カスタム AI の活用。採点 AI による自動採点。

<生成 AI で業務の削減時間が大きくなる理由>

「考える時間」+「確認する時間」+「整える時間」“3つの時間”に生成 AI を活用することで大きく業務時間を削減することができた。特に、校務での高頻度の定型作業とゼロから始める起案作業が削減効果の中心になっている。

▼カスタム AI 活用例

▼一人当たりの平均削減時間

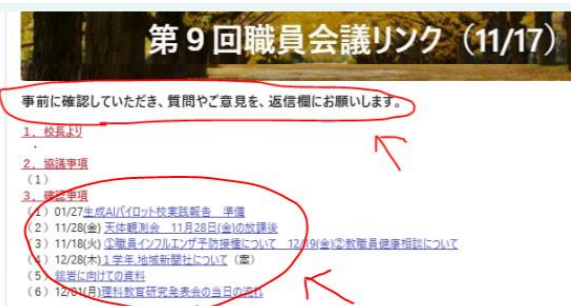


6 業務の効率化を図り、教材研究の時間を捻出

生徒に向き合う時間や、教材研究等に取り組む時間を生み出すために、いかに日々の業務を効率化するかが求められる。本校は、SSSPの業務改善ワーキンググループの指定校でもあるため、クラウドを有効活用した業務の改善に取り組んでいる。MicrosoftのTeamsを利用し、データでの資料の共有をはじめ、資料の協働編集、また紙媒体で行っていた起案についても、すべてクラウド上に行っている。

業務効率化の基本的な方針としては、「わかりやすく、続けやすく、広げやすい取組」である。クラウド上で行うことにより、以前と比べ、わかりづらくなったでは本末転倒である。誰でも使えるよう、また全員が共有しやすいように、取組を行っている。以下に、取組の一部を紹介する。

▼資料の事前共有とリンクの活用場面



業務改善を進めることで、「質を深く追求できるようになり、より良い授業づくりにつながっている」「生徒一人ひとりと向き合う時間が増え、提出物等も丁寧に確認できるようになった」「対面で行っていた業務が効率化され、時間的余裕をもって正確な事務処理に集中できるようになった」という実感や効果が教職員の中に生まれている。

今後としては、まずはやってみようという意識で試行、そして改善を図ることで、生成AIの利用を業務の中に広げ、生徒へ向き合う時間をさらに生み出し、教師の質的向上へつなげていけるよう取り組んでいきたい。

7 資質・能力の評価について

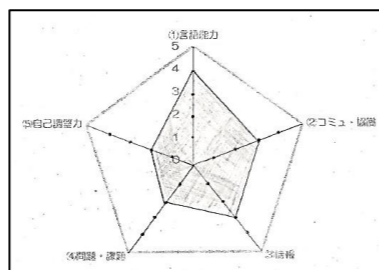
資質・能力の成長を的確に把握するため、本校では学期末に5つの資質・能力を5段階で評価し、レーダーチャートとして可視化する取組を進めてきた。自己評価を行わせることで、日々の学習と資質・能力の関係を意識化させ、次学期はどの資質・能力を特に伸ばしたいかなどの目標立てを行わせた。

また、3年間の推移をみとるために、委嘱2年目となる中学2年生（回答数64名）を“継続観察学年”として設定し、1年間の変容をみとるアンケートを実施した。本調査は3年間同一学年を追跡することで、資質・能力の伸びや学習場面との関連を中期的にみとることを目的としている。

結果から、各資質・能力の年間の自己評価、またどの活動でその力が身に付いたと思うかなどを調査した。R7実施アンケートでは、5項目すべてで上昇が見られ、言語4.00(+0.86)、情報活用3.87(+0.94)、問題発見・解決3.60(+0.77)、協働・コミュニケーション4.29(+0.59)、自己調整3.54(+0.69)と改善が確認された。特に発表・まとめ・資料活用・協働の場面で成長実感が多かった。

しかし同時に、成長の背景にある課題も明らかになった。“学びは役に立つ”と感じる生徒が98%を占める一方で、語彙不足・伝え方の不安・計画化の困難といった学習における課題が意欲の阻害要因となっている実態が見られた。必要性の理解がそのまま意欲に転化するわけではなく、学習方法の支援によって「できる感覚」を育てることも、次年度の重要な改善課題である。

▼レーダーチャート



8 令和7年度の振り返り

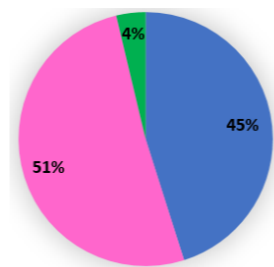
7で紹介したレーダーチャートやアンケートとは別に、「全国学力・学習状況調査」「さいたま市学力学習状況調査の生活習慣に関するアンケート」をベースにしたアンケートを実施し、7で紹介したものは異なり、より具体的な行動、場面を質問項目に設定したものになる。

※ 国や市で実施されたアンケートをベースにすることで、数値の比較を目的としている。

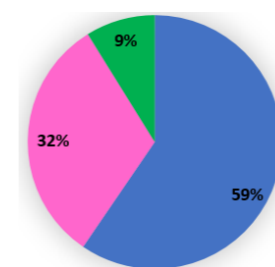
<独自アンケートの結果（一部抜粋）> ※ ■: そう思う ■: ややそう思う ■: あまりそう思わない ■: そう思わない

※数値はR7年度全校生徒対象（回答数215人）

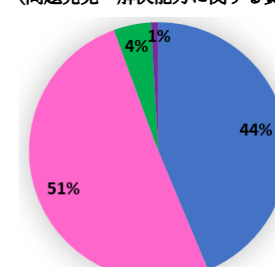
説明的な文章を読み、目的に応じて必要な情報に着目して要約し、内容を解釈しますか？（言語能力に関する質問）



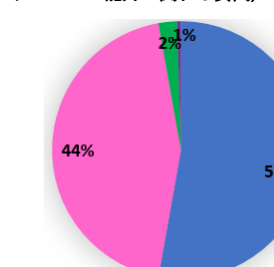
プレゼンテーション用のスライドなどを作る技術が向上したと思いますか？（情報活用能力に関する質問）



授業では、課題の解決に向け、自分で考え、自分から取り組んでいましたか？（問題発見・解決能力に関する質問）



授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切に、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか？（他者と協働する力・コミュニケーション能力に関する質問）



1、2年生のときに受けた授業では、英語を読んで（一文一文ではなく全体の）概要や要点をとらえる活動が行われていたと思いますか（全国学力・学習状況調査2025より）
全国：そう思う 33.0%
ややそう思う 48.8%

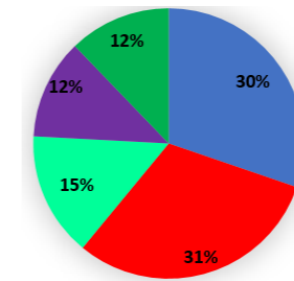
あなたは自分がPC・タブレットなどのICT機器を使って学校のプレゼンテーション（発表のスライド）を作成することができますか（全国学力・学習状況調査2025より）
全国：そう思う 32.1%
ややそう思う 44.7%

1、2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか（全国学力・学習状況調査2025より）
全国：そう思う 23.5%
ややそう思う 54.3%

授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切に、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか（全国学力・学習状況調査2025より）
全国：そう思う 45.6%
ややそう思う 46.3%

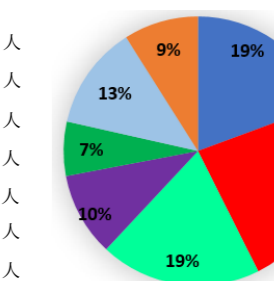
教科等横断的な学びについて（コラが授業や総合的な学習の時間などの探究的な学び）についてどう感じましたか？※当てはまるものをすべて選んでください

- 興味がたかまった 124人
- 理解が深まった 136人
- 授業内容が実生活に繋がっていると感じた 61人
- 学んだことが話される実感があった 49人
- こうした授業の機会がもっとほしい 50人



社会人講師（ゲストティーチャー）による授業についてどう感じましたか？※当てはまるものをすべて選んでください

- 興味が高まった 110人
- 理解が深まった 132人
- 新しい視点を得ることができた 110人
- 自分の将来について考えるきっかけになった 57人
- 授業内容が実生活に繋がっていると感じた 37人
- 社会人講師の話が聞けて楽しかった 71人
- こうした授業の機会がもっとほしい 51人



<上記以外の質問項目の結果から>

「本校が育成を目指す資質・能力の多くで肯定的な水準（3.0以上）が維持・向上しており、学校全体の取組の効果が確実に表れている。特に「学んだことを生活で活用する」（3.07→3.21）や「学び方を工夫する」（3.37→3.46）、「諦めずに方法を考える」（3.19→3.31）など、問題発見・解決や自己調整力に関わる項目は大きく改善した。また、「話し合いで考えを深める」（3.40→3.42）、「協力して課題を解決す」（3.48→3.50）、「相手の気持ちを考えて話す」（3.52→3.60）といった協働・コミュニケーション能力も向上し、対話重視の授業改善の成果が生徒の行動に表れている。一方で、「発表の構成を工夫した」（3.40→3.31）や「スライド作成技術」（3.53→3.51）はわずかに低下しており、アウトプット面の強化が今後の課題である。特に「家で計画を立てて勉強する」は2.72→2.70と依然として低く、自己調整力の中核である計画性の育成が求められる。

<R8年度に向けて>

Society 5.0や人生100年時代を見据え、自らの学びを自ら調整し、主体的に探究を深めていくことができる「自立した学習者」の育成に向けて、「教科」と「総合」を往還させながら資質・能力が育成され、その成長が確かに“見える”学校をつくる。そのために、授業改善・見取りの精度向上、ICTや生成AIの活用を組織的に結び付け、教育活動全体の質の向上を図る。